

小袖雛形本『新撰御ひいなかた』における文字文様

馬場 彩果^[1] 植草学園大学発達教育学部

Moji Monyou in the Design Book of Kosode “Shinsen On-hiinakata”

Ayaka BABA Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

小袖における文字文様についての研究は、現在のところあまり深くなされていない。そこで本研究では文字文様の実態を明かすべく寛文7年刊の小袖雛形本『新撰御ひいなかた』を資料に、これに含まれる文字文様の様相を調査した。調査の結果より、文字の内容や書体など当書の文字文様の傾向を捉えることができ、文字と絵模様を手がかりに各意匠の主題も明らかにすることができた。それらにより、小袖意匠における文字の重要性が認められた。なお、先行研究においてはほとんど見られない書の観点を踏まえることで本研究の独自性を築いた。

キーワード：文字文様, 小袖, 小袖雛形本, 意匠, 書風

There are few preceding studies of Moji Monyou in Kosode, so the purpose of this study was to analyze the design book of Kosode “Shinsen On-hiinakata”, and figure out the actual condition of Moji Monyou. As a result, some currents of Moji Monyou such as the meanings of words which are written in Kosode were discovered. The theme of each Kosode design was also grasped by the letter and painting on the Kosode. From these factors, the importance of letters in Kosode design became apparent. The distinctiveness of this study, by researching about Moji Monyou in terms of Japanese Calligraphy is should also be noted.

Keywords : Moji Monyou, Kosode, the design book of Kosode; Kosode hinagata-bon, Kosode designs, strain

1. はじめに

小袖における文字文様は、寛文期（1661～1673）頃に頻繁にみられる。文字を用いて、あるいは文字と絵模様との組み合わせにより「源氏物語」や「伊勢物語」などの物語や「百人一首」等の詩歌を表現することや、ルーツとして葺手絵などの工芸意匠が挙げられていることは知られているものの、実際の意匠を紹介した論文や文字文様小袖に特化した研究は少なく、具体的な意匠主題や明確な流行年間、着

用者など不明な点も多い。また、文字文様として刺繍や染め等の技法により表される文字はどれも筆書きの美しさがあり、文字文様小袖は書を用いた優れた芸術作品であるとも筆者は捉えているが、これを書の観点を踏まえて研究しているものはほとんど確認されない。

そこで本研究は、文字文様の全容解明に向け小袖雛形本における文字文様を検証し、今後の小袖研究の基礎資料とすることを目的とした。対象とした雛形本は、寛文期に刊行された最古の小袖雛形本『新

[1] 著者連絡先：馬場彩果

撰御ひいなかた』である。当書に含まれる文字文様小袖について、文字の内容や、書体、文字や絵模様の位置などを調査した。その上で意匠主題を推察し各意匠の考察を行った。意匠考察の際には、文字の書風や書きぶりに特に着目した。文字文様の検討に書の観点を踏まえることは新たなアプローチであり、本研究の独自性といえる。さらに、『新撰御ひいなかた』における文字文様の出現の傾向や特徴を明瞭に捉えるために、数量的にも把握した。

2. 方法

2.1 研究資料

寛文7年(1667)刊の『新撰御ひいなかた』に収載された文字文様意匠を数えると、45図であった。これは実に全体の4分の1以上を占める数である。豊富な意匠数のみならず、各意匠のもつ独創性や大胆さといった質的な面も他の雛形本を圧倒しており、これらの理由により本研究では『新撰御ひいなかた』を研究資料とした。

上野¹⁾や丸山²⁾によると当書は、序題に「新撰」の文字があることから『新撰御ひいなかた』と呼ばれるが、これに対する古版の伝存が明らかでないことなどから単に『御ひいなかた』、あるいは『寛文雛形』とも称されることがある。画者は不明である。上下巻に100図ずつ、計200図の小袖文様が記載されており、寛文6年(1666)刊の『御ひいなかた(新撰御ひいなかた)』とほぼ等しい内容であるが、寛文6年版には記されている書肆名が7年版では削り取られているなど、若干の差異が確認されているともある。寛文6年版と合わせて最古の雛形本として知られており、小袖及び小袖雛形本の研究上欠くことのできない出版である。他の研究者^{3) 4) 5)}も多く当書を扱っているが、ここに含まれる文字文様に深く注目した研究は少なく、その点も筆者が『新撰御ひいなかた』を研究資料に選定した理由である。

2.2 調査項目・観点

調査項目は5点設定した。①小袖に置かれた文字、②①の書体、③雛形本に記述された地色・文様説明、

④文字の位置、⑤絵模様の位置、である。さらに①～⑤を踏まえて各意匠の考察と意匠主題について⑥としてまとめた。

①と③については、小袖図とその左右に記された説明書きをそのまま書き出した。②については、それぞれの文字を篆書体、隸書体、草書体、行書体、楷書体のどれに当てはまるかを考え振り分けた。ただし、仮名文字も見受けられたので、その場合は書体ではなく「仮名」と記入した。また、ひとつの小袖図に2文字以上の文字が明らかに異なる書体で配されているものについては、「草書体、楷書体」のように複数の書体名を記した。④と⑤については、文様の位置を見たまに書き入れた。特に絵模様に関しては、複数の種類の絵模様がある場合は素材別に位置を記入した。なお、『新撰御ひいなかた』の小袖図はすべて背面図であるので、文字および絵模様の位置とはすべて背面におけるそれである。⑥では、先行研究にはあまりない、文字の表し方、書きぶりに特に着目しながら意匠考察を行った。意匠主題については、断定できたものだけでなく推測段階のものも記した。これに関してはすべてを断定できたわけではないので、今後さらに研究を進める。

2.3 数量的分析の方法

調査結果を考察するための数量的な分析方法について述べる。

主に、小袖に置かれた文字の種類、文字内容のジャンル、意匠主題、文字の書体、文字の位置、絵模様の位置について数量的な分析を試みたが、文字の種類、文字内容のジャンル、意匠主題に関しては調査結果をもとに筆者が手作業で分類し、計上した。

残る書体、文字の位置、絵模様の位置に関しては、まず前項で示した調査項目②、④、⑤の結果を、Excelを用い条件を設定して抽出した。それぞれの抽出条件を以下に示す。

書体については、＜「篆書体」を含む＞、＜「隸書体」を含む＞、＜「草書体」を含む＞、＜「行書体」を含む＞、＜「楷書体」を含む＞を条件とした。また、書体を振り分けられない仮名書きの文字も存在したため、＜「仮名」を含む＞も条件に入れた。先述したが、同一小袖図の中に異なる書体の文字が配されている場合もあるため、＜含む＞の条件設定

で抽出を行い、延べ数を提示した。文字の位置については、分析上有用な数値がとれると予測された6条件、＜「背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ」に等しい＞、＜「背面右肩部」に等しい＞、＜「背面右肩部」を含む＞、＜「背面上部」を含む＞、＜「背面中部」を含む＞、＜「背面下部」を含む＞を抽出条件とした。絵模様の位置に関しては、絵模様は文字よりも加飾面積が広いため、抽出条件も多く設定し13条件でふり分けした。またこの条件は、『新撰御ひいなかた』における寛文模様の比重の大きさを確認できるような内容とした。＜「背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ」を含む＞、＜「背面左肩部」を含む＞、＜「背面右肩部」を含む＞、＜「背面右裾」を含む＞、＜「背面左裾」を含む＞、＜「背面上部」を含む＞、＜「背面中部」を含む＞、＜「背面下部」を含む＞、＜「背面全体」を含む＞、＜「背面右半分」を含む＞、＜「背面左半分」を含む＞、＜「右袖」を含む＞、＜「左袖」を含む＞の13条件である。

3. 結果

前章で述べた結果を、雛形ごとに以下に示す。なお、調査対象の雛形図(図1-1～45)を附したので参照されたい。

- 1) ①和河浦 ②草書体, 行書体 ③地ねすみいろ わかのうらなみのもやう ④背面上部・中部・下部 ⑤背面右袖～右裾 ⑥和歌山市の南西部に位置する景勝地, 「和歌浦」を表した意匠と思われる。「和」と「河」の文字は動きのある書風で, 白波立つ絵模様との相性がよい(図1-1)。
- 2) ①一来 ②草書体 ③ちもへきいろ はしにいらいほうしのもやう ④背面右肩部 ⑤橋は背面左肩部～右袖, 波は右肩部～中央裾 ⑥『平家物語』の宇治川の合戦にて, 筒井淨妙が細い橋桁を渡ろうとしたところに一来法師がその頭上を飛び越えて現れる, という場面をテーマとした意匠。一来法師の強さや俊敏さなどが文字からも伝わる(図1-2)。
- 3) ①木 ②篆書体 ③ちうこん すみのもやう ④背面右袖・右肩部・右腰部 ⑤背面右肩部 ⑥書に用いる墨が4本ほど描かれ, そのうちの1本に篆書体の「木」の文字がある。横には同じく篆書体の「木」の文字が, 枝垂れる柳のようにしなやかに書き連なっている(図1-3)。
- 4) ①老 ②行書体 ③ちとのちや おひまつのもやう ④背面上部 ⑤背面左肩部～右腰部～中央裾までのカーブ ⑥一列に並んだ松の枝の絵模様に, 大文字が置かれた大胆な意匠。絵と文字を組み合わせる謡曲「老松」を表現している(図1-4)。
- 5) ①水 ②草書体 ③地こん 大はしに水のもやう ④背面上部・中部 ⑤背面左肩部～右袖 ⑥橋の下に流れる水を, 絵ではなく文字で表している。文字には草書体を用い, 崩すように書くことで水流を感じさせる点が技巧的である(図1-5)。
- 6) ①大小 ②楷書体 ③ちくろへに 大小のまるにかうし ④背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ ⑤文字の位置と同様 ⑥「大」と「小」の文字を丸で囲むことで大の月と小の月を意味し, 暦を表しているものと考えられる。规律的に並んだ意匠からは, やや静的な印象をもつ(図1-6)。
- 7) ①初雪 ②草書体 ③ちかのこおりもん はつゆきのもやう ④背面右肩部 ⑤雪輪は文字と同じ(雪輪の中に文字がある), 菱は背面全体 ⑥菱形の絵に大きな雪輪模様がよく目立つ。文字があることで, ただの雪ではなく, 初雪であることがわかる。小袖全面に絵模様があるのは, 当書においては珍しい構図である(図1-7)。
- 8) ①蜘蛛 ②草書体 ③ぢきゝやう くもにくものすのもやう ④背面右肩部 ⑤背面右袖を中心に左袖～中央裾まで広がっている ⑥「蜘蛛」の文字はだいぶ崩した形で書かれている。虫偏の4画目が短く, 2画目から突き出していないので「田」のようにも見える。始筆や終筆の細さが, 蜘蛛の足のようにも見立てられる(図1-8)。
- 9) ①時雨 ②行書体 ③地花いろ かくにすしのもやう ④背面右肩部 ⑤背面左袖～右腰部～右裾までのカーブ ⑥絵模様の正体は不明であ

るが、扁額とともに描かれていることから高貴なしつらえ物の類かと察する（図 1-9）。

- 10) ①わか草 ②仮名 ③ぢむらさき わかくさにすゝき ④背面上部・中部・下部 ⑤背面右肩部，左中部～左下部 ⑥若草は春，すすきは秋。文字と絵模様の季節が不整合である。奈良県の若草山との関連も考えられるが真相は不明。文字は平仮名も用いて優しく，柔らかに書いている（図 1-10）。
- 11) ①本 ②楷書体 ③ぢもゝいろ たちあふひのもやう ④背面右袖 ⑤背面上部・中部・下部 ⑥『精選版 日本国語大辞典』によると，歌舞伎「日本晴伊賀報讐（実録伊賀越）（1880 年）」の五幕に「立葵（タチアフヒ）の紋散らしの襖」があるとされる。丸で囲んだ「本」の文字の意味が不明であったが，題にある「日本晴」を表すのかもしれない。時代的に齟齬はあるものの，この歌舞伎との関連性は強いものと思われるので，今後さらに掘り下げたい（図 1-11）。
- 12) ①露 ②草書体 ③ぢうこん さくらにつゆもじのもやう ④背面上部～下部 ⑤桜の花は文字と同じ（文字に沿って花が描かれている），露は背面右裾 ⑥「露」の文字の最終画が裾まで伸ばされ，それに沿うように桜の花が描かれている。まだ寒い春の早朝の情景がこの意匠から伝わってくる（図 1-12）。
- 13) ①鴈 ②草書体 ③ぢうすかき あしにがんのもやう ④背面右肩部 ⑤網は背面右肩部～右袖，葦は背面下部 ⑥網の絵模様に「鴈」の文字があり，鴈が網に掛かっている様子が表されている。特に，文字の 2 画目が，バタバタと広げた翼のように見える（図 1-13）。
- 14) ①穂 ②草書体 ③ぢ白あさきゆかた あきのもしにすゝき ④背面右肩部 ⑤背面右半分 ⑥「穂」の文字は背面右肩部に，少し斜めに傾いて書かれている。すすきの絵模様は雪輪の中に描かれ，秋からしだいに雪へと移行行く季節を表現しているものと思われる（図 1-14）。
- 15) ①菊 ②行書体 ③ぢあかへに きく水のもやう ④背面右肩部 ⑤背面上部～下部 ⑥「菊」の最終画で文字を丸く囲んでいる。この

ような表現方法は，後に出版される雛形本にも時折見受けられる（図 1-15）。

- 16) ①丑寅卯辰巳午未申 ②行書体 ③ぢあかへに えとのまるにひだりまき ④背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ ⑤丸は文字と同じ（丸の中に文字がある），縞は背面全体 ⑥文字の配置の仕方が 6) の意匠とよく似ている。「ひだりまき」とは，17) の意匠と説明文より，右上がりの斜線のことと推察される（図 1-16）。
- 17) ①雲井 ②草書体 ③ぢくろへに くも井に右まき ④背面右肩部・右裾 ⑤背面全体 ⑥大胆な書きぶりの大文字が太い縞模様と相まって非常に目立つ。「右まき」とは左上がりの斜線を指すものと考えられる。雲井とは，雲のある場所，大空，宮中などを意味する。また，「雲居」は万葉集でも数度用いられている言葉である（図 1-17）。
- 18) ①鳥 ②行書体 ③ぢもへき とりにあみのもやう ④背面右肩部 ⑤背面左肩部～右裾 ⑥広がる網に，鳥がかかっている様子。行書体で書かれた文字，特に最終画が鳥の尾羽を表しているように見ることができる（図 1-18）。
- 19) ①小蝶 ②行書体 ③ぢいろへに きくにこてう文字くつし ④背面上部 ⑤背面右半分 ⑥説明文にもあるように，「蝶」の文字が崩して書かれている。そして長く伸ばされた最終画に沿うように，菊の大輪が描かれている。10) の意匠と同様，季節の不整合があり，明確な主題は掴み取れない（図 1-19）。
- 20) ①雪 ②行書体 ③ぢもゝいろ はしにかきつはた ④背面右袖 ⑤橋は背面左袖～右袖，杜若は右裾 ⑥八橋と杜若，そして雪が揃っており，この意匠は間違いなく『伊勢物語』第九段『東下り』を表しているといえる（図 1-20）。

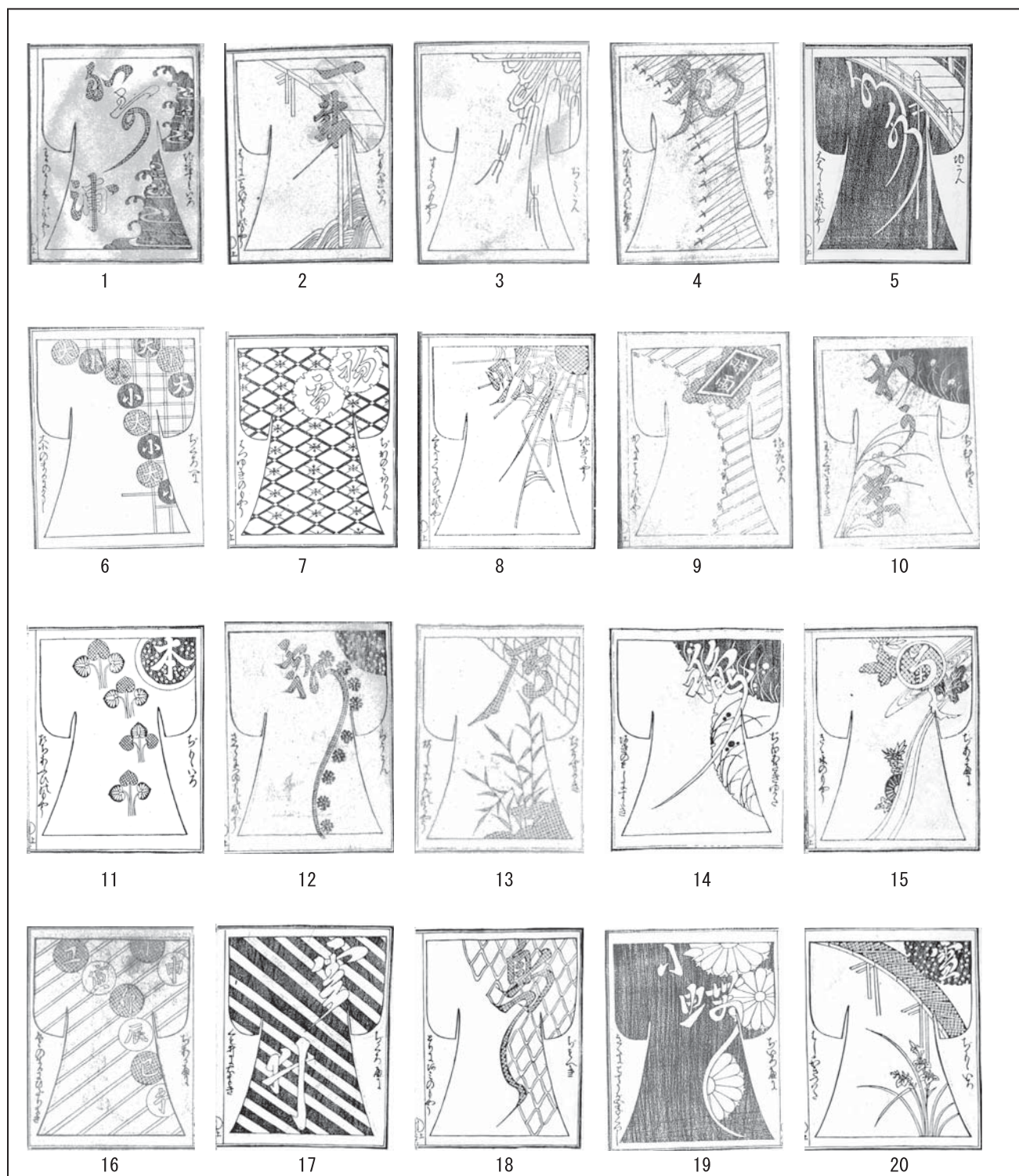


図1 『新撰御ひいなかた』に収載の文字文様45図(次頁へ続く)



図1 『新撰御ひいなかた』に収載の文字文様 45 図（前頁の続き）

- 21) ①井筒 ②行書体 ③ちうこん 井つゝの文字のもやう ④背面上部・下部 ⑤波は背面左肩部～右袖, 紅葉は右袖 ⑥『伊勢物語』第23段「筒井筒」が意匠主題。波が描かれているが, 物語の中でも「白波」が含まれる歌が詠まれている。「井」の文字は最終画が伸ばされ, 波の絵模様と同様, 流れが感じられる(図 1-21)。
- 22) ①鶯 ②草書体 ③ぢさらさそめ 梅にうくひすのもやう ④背面右肩部 ⑤背面左肩部～右袖～中央裾 ⑥梅の枝の上に, 少し傾いた「鶯」の文字が配されている。枝にとまった鶯がさえずっている様子が目に浮かぶようである(図 1-22)。
- 23) ①西行 ②草書体 ③ちうこん さいぎやうさくらのもやう ④背面右肩部 ⑤背面右肩部・右袖 ⑥「西行」の文字と桜の絵模様で, 「西行桜」を表している。「西行桜」とは, 室町時代に成立した世阿弥の能楽作品である。文字はゆったりと伸びやかに書かれ, 能の優雅さを感じることができる(図 1-23)。
- 24) ①秋野之 ②行書体 ③ぢしろあさき あきのゝにすゝきのもやう ④背面上部・中部・下部 ⑤背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ ⑥すすきと月とで, 文字にもある通り, 秋の野を表現している意匠。文字は一部が長く書かれ, すすきのようにも見える(図 1-24)。
- 25) ①無佐し ②仮名 ③ぢむらさき むさし野の月のもやう ④背面上部・中部・下部 ⑤背面左半分 ⑥珍しく背面左側に文様の置かれている意匠である。絵模様だけでは単なる秋の風景であるが, 文字があることでその場所が武蔵野であることが判明する(図 1-25)。
- 26) ①咲 ②行書体 ③ぢむらさき ふぢの花のもやう ④背面上部 ⑤藤の花は背面中央, 網は右肩部・右袖 ⑥「咲」という文字の周りを, 藤の花が丸く囲んでいる珍しいデザイン。藤の花に合わせてか, 地色は紫と指示されており, 文様との相性は良いと想像できる(図 1-26)。
- 27) ①氷 ②行書体 ③地くろへに なみにせいかい水にこおりちらし ④背面右肩部 ⑤青海波は背面左袖・左肩部, 白波と水は左腰部～右裾 ⑥穏やかな青海波と荒々しい白波とが一緒に描かれている。「氷」の文字があることから, 冬の冷たい海を表現していると考えられる(図 1-27)。
- 28) ①駒 ②草書体 ③ちひろと ひやうたんにこまのもやう ④背面下部 ⑤背面右半分 ⑥ことわざ「瓢箪から駒」を表した意匠。文字は一文字の場合, 小袖の上部に配されることが大半であるが, これは裾に近い位置にある。これには, ひょうたん→駒という順序で視線を誘導し, ことわざへと理解をつなげさせる狙いがあるものと思われる(図 1-28)。
- 29) ①夕霧 ②草書体 ③ぢくろへに がくにみすくづしのもやう ④背面上部 ⑤背面上部 ⑥垂れ下がった御簾と扁額が描かれ, 宮殿などの高貴な場所という印象である。「夕霧」は『源氏物語』との関連が考えられる(図 1-29)。
- 30) ①郭公 ②行書体 ③ぢ白きゝやう ほとゝぎすにすゝきのもやう ④背面上部・下部 ⑤背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ ⑥小袖の文字は「郭公」であるが, 説明文は「ほとゝぎす」である。平安時代以降は, ほととぎすに「郭公」の字を当てることが多いらしく, これもその例と思われる。「郭」のおおざとが非常に大きく, 強調されているのが目立つ(図 1-30)。
- 31) ①木 ②篆書体 ③地こいかばちや 花さくら木のもやう ④背面上部 ⑤背面上部～中部 ⑥文字を見ると「朱」の篆書体だが, 説明文や絵模様との関係を見ると「木」の間違いではないかと考える。「木」であれば, 桜の枝に花がついている春の景色が想像でき, 「朱」よりも意匠理解が自然である(図 1-31)。
- 32) ①寿 ②楷書体 ③ちうこんけんぼう がくにすゝきのもやう ④背面右肩部 ⑤扁額は背面左肩部～右腰部までのカーブ, すすきは扁額の中 ⑥大きな扁額の中にすすきの絵と「寿」の文字が配されている。扁額は斜めに傾いているのに対し, 文字はまっすぐ書いてあるので違和感がある(図 1-32)。
- 33) ①夜中 ②草書体 ③ちふちいろ かくに夜中なみのもやう ④背面上部・中部 ⑤扁額は背面左肩部～右袖までのカーブ, 花は扁額の中,

- 波は下部 ⑥扁額の中に菊のような花がいくつも描かれている。文字と絵模様との関係は不明である（図 1-33）。
- 34) ①天車 ②楷書体 ③ぢあさきゆかたそめ 天くるまのもやう ④背面上部・中部 ⑤背面右袖 ⑥小袖の余白を存分に生かし、広がりのある伸びやかな文字を書いている。天車の意味はわからないが、雨車などとの関係が考えられる（図 1-34）。
- 35) ①木 ②篆書体 ③ぢさらさそめ から花に木の字くつし ④背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ ⑤背面右肩部・右袖 ⑥小袖に置かれた文字は、正しくは「朱」であるが、「木の字くつし」と説明に記されており、31) の意匠と同様、「木」の間違いと思われる。文字は木の幹のように縦に長く、しっかりとした線である（図 1-35）。
- 36) ①浦風 ②草書体 ③ぢもゝいろ うらかせになみしま ④背面右肩部・左裾 ⑤背面左肩部～右袖 ⑥浦風とは、海辺を吹く風、浜風のこと。動きのある草書体の文字が、風に吹かれている様子をよく表現している。波を表した小袖の地色が桃色である点が興味深い（図 1-36）。
- 37) ①岑雪 ②行書体 ③地みついろ みねのゆきのもやう ④背面上部・下部 ⑤背面右半分 ⑥非常に大きな雪輪が特徴的である。文字がなければ単なる雪の景色とを感じるが、文字があることでこれが岑に積もる雪であると理解することが可能となる（図 1-37）。
- 38) ①丑寅卯辰巳 ②行書体 ③地こん えとのまるにたつなみのもやう ④背面右袖 ⑤花は背面右袖、波は右裾 ⑥干支を表現するのは、16) の意匠に続き 2 つ目である。文字が円を描くように書き連ねられているが途中で途切れているので、小袖の前面にも続いているものと察せられる（図 1-38）。
- 39) ①月 ②行書体 ③ぢみついろ 月にひやうたんなかし ④背面右肩部 ⑤背面右袖から左肩部、右裾まで伸びている ⑥「月」の文字が崩して書かれており、ひょうたんの枝の一部のようにも見える。月とひょうたんの関係性は不明である（図 1-39）。
- 40) ①鈴虫 ②草書体、楷書体 ③ぢけんぼう すゝむしにすゝきのもやう ④背面右肩部・左裾 ⑤背面右半分 ⑥すすきの絵模様と一緒に鈴虫と思われる細かい絵も描かれているが、文字でも大きく「鈴虫」と書き、強調されている。秋の風物詩を意匠化したものである（図 1-40）。
- 41) ①青葉 ②楷書体、草書体 ③ぢしもふりそめ あをはくつしのもやう ④背面上部・下部 ⑤背面上部～中部 ⑥「青」の 5 画目が長く伸ばされ、それに沿うように葉が描かれているが絵模様はそれだけで、全体的に余白が多く寂しい印象である。「青」は楷書体で、「葉」は草書体で書かれている（図 1-41）。
- 42) ①龍田 ②草書体、楷書体 ③ぢ白あかべに たつたのもみちのもやう ④背面右肩部・左裾 ⑤背面左袖上部～右腰部～右裾までのカーブ ⑥「龍田」は竜田川の意。竜田川と紅葉は定番の組み合わせで、他の雛形本でも散見される。2 字とも、最終画が長いのが特徴である（図 1-42）。
- 43) ①小町 ②楷書体 ③ぢあかへに 物の本に小町のもやう ④背面右肩部・左裾 ⑤背面上部・中部・下部 ⑥「小町」と小袖に書かれた意匠はこの他には見たことがない。小野小町の知性あるイメージをもとに、本の絵を描いたものと推察される（図 1-43）。
- 44) ①枕 ②行書体 ③地白きゝやう なみまくらのもやう ④背面右肩部 ⑤背面左肩部～右袖～右裾までのカーブ ⑥「波枕」とは、船中で旅寝をすること、枕もとに波の音が聞こえてくることである。絵と文字とで「波枕」を表現しており、どちらかが欠けると意匠が成立しなくなる（図 1-44）。
- 45) ①初 ②草書体 ③ぢあかへに 花とひしはつ雪の上もん ④背面右肩部 ⑤雪は背面右肩部～右袖、菱はそれ以外の部分 ⑥背面右肩部から右袖にかけて、小さな丸がいくつも描かれているが、「初」の文字があることでそれが雪であり、かつ初雪を表現した意匠であると理解することができる。文字が重要な役割を持っている（図 1-45）。

4. 考察

4.1 文字の種類・ジャンル

小袖に書かれた文字の種類に着目すると、「木」の文字が3図、干支が2図で見られた以外は重複するものがなく、42種のさまざまな文字（ことば）が小袖に書かれていることがわかった。文字（ことば）の内容は、「わか草」や「菊」など、植物に関する名が6あり、「鳥」や「小蝶」など生き物を指す文字は7つあった。これらに「水」や「初雪」などの自然事象の名を加えた数は23で、全体の半数を占めた（表1）。絵模様をみても植物を含め自然の風景が描かれた意匠が7割以上あることから、多様な素材が用いられた寛文小袖といえども、小袖意匠における基盤のジャンルであることに変わりないようである。他には「和河浦」、「無佐し」、「龍田」の地名を特定できる文字や、「天車」と「駒」と「枕」の器物の名、「一來」や「西行」、「小町」などの人物名があった。また、「井筒」、「西行」、「武佐し」、「龍田」などは、絵模様のみでは表現しきれない意匠主題を明確に提示するための決め手として書き表された文字（ことば）であり、これは非常に興味深い。一文字でも必ず「意味」をもつ文字の力の大きさを感じさせられた。

4.2 文字の書体・書風

最も多かった書体が草書体の延べ19図で、続いて行書体の延べ17図であった（表1）。全体の8割にこの2書体が用いられ、また書体として区分できない仮名文字も見受けられたのは、日常的に使われていた書き方であったためと考えられる。その意味では、篆書体の文字が3図に存在することは意外な結果であった。当時の人々、特に女性において篆書体を心得ていた者がどれだけいたかといったことを含め、江戸時代の女性たちの書をはじめとした教育の様相を今後明らかにしていきたい。

文字については、その書風・書きぶりにも注目すべきである。総じて大胆な筆遣いをしており、最終画を大きく伸ばし躍動感溢れる文字を書き表している点が特徴といえる。図1-5や図1-14、42などがその最たる例である。また、図1-31と図1-35は横画を極端に短く、反対に縦画を大胆に伸ばし円弧を

描くように小袖に配することで、文字のみでも寛文模様を表現している。それから図1-12、19、22、26、31、39、41などは文字の書き方より、文字と絵模様が一体化した意匠ということがうかがえる。図1-22、31、39、41については文字を木の枝のように見立て、周りに花や葉を描いているのがわかる。特に図1-22などは梅の枝に文字が見事に入り込み、文字を見逃してしまいそうなほど絵模様と巧みに結合している。文字を絵画的にも捉えている意匠である。図1-12、19、26は、文字の一面に絵模様を添わせたり、文字の周りを絵模様で囲んだりするなど、これらも意匠に文字があるからこそ出来上がるデザインであり、文字文様の重要性がわかる。

『新撰御ひいなかた』の画者は不明であるが、小袖に配された文字は、個性的なものもありつつも総じて美しく、筆順も正しい。筆順に関していえば、当書以外の雛形本や現存の実物小袖を実見しても、筆順通りに刺繍等の加飾が行われている。着用者だけでなく小袖製作者の、書の技術を含めた教養レベルについても今後の研究課題とする必要がある。

4.3 文字の位置・絵模様の位置

文字の多くは背面右肩部、または背面右肩部を含んだ位置に書かれていた（表1）。小袖の中で最も目がいきやすいのが背面右肩部であり、文字文様は意匠の中で重要な素材として扱われていたことがよくわかる。河原⁶⁾は『色紙御雛形』（元禄2年（1689）刊）について「主題提示の文字や絵模様は最も注視される位置、即ち小袖の右背部に配置される」と述べているが、この類型的手法は最古の雛形本からすでに存在していたことが判明した。

絵模様の位置を調査したのは、『新撰御ひいなかた』における寛文模様の頻出を、意匠の目視のみならず数値によっても確かめるためであった。多種多様な絵模様が描かれているため、整ったカーブを描くような絵模様はさほど多くなかったものの、左肩部、右肩部、右袖、右裾、背面右半分のいずれかに絵模様のある意匠数が非常に多いことや、背面左側、特に左裾に絵模様が描かれた意匠がほとんどないことから、当書には小袖面積の半分にのみ大胆な文様を施す寛文模様が大半を占めているということが数量的にも確認された（表1）。

4.4 文字文様を用いた意匠主題

文字や絵模様の内容から意匠主題を検討したところ、物語をテーマにした、もしくは物語と関連性のある意匠が4図、謡曲や歌舞伎、能楽を表現した雛形が1図ずつ、実在する場所、名勝を主題としたものが2図確認できた(表1)。全体の5割以上は不特定の地の情景が表された意匠は占め、配された文字や絵模様によって季節の特定できるものも多く見受けられた。文字文様は物語や詩歌を表現するために有効で多用されると言われているが、『新撰御ひいなかた』においてはその数は少ないといえる。寛文7年頃はまだ物語や詩歌を意匠主題にする風潮は弱かったのか、それとも当書に限った結果であったのか、他の雛形本を多数実見し考証する必要がある。なお、詩歌に関して、本研究では詩歌を主題とした意匠は見当たらなかったが、これは筆者が意匠素材を十分に検討しきれず見落としした可能性もある。殊に、特定の場所が描かれた意匠などは詩歌がテーマとなっている場合があるので、今後も関連する詩歌がないか注意深く検討したい。

5. まとめ

寛文期に刊行された最古の小袖雛形本『新撰御ひいなかた』に掲載されている文字文様の実態把握に取り組んだ。

草書体と行書体を中心とした書体で書かれた文字はどれも美しく、かつダイナミックで、見る者にインパクトを与える。中には絵画的に文字を書き表した雛形もあり、画者の技巧が感じられた。また、寛文模様を背景に小袖の最も目立つ位置に文字が配されたり、文字なしでは意匠主題が表現できなかったりするなど、文字文様は意匠の中核をなしていた。意匠主題としては、自然に関する文字(ことば)と絵模様を使い、自然の情景を表現するのが当書の主流であった。

文字文様を用いた小袖意匠45図を一つひとつ読み解き、文字の内容や表し方、絵模様との関係性、それらを総合して意匠主題を考えたことで文字文様の深い世界を味わった。本研究により、『新撰御ひいなかた』に含まれる文字文様の様相を多分に理解

表1 『新撰御ひいなかた』に含まれる文字文様に関する調査結果

項目		数
総雛形数		200
文字文様数		45
文字のジャンル	植物関係	6
	生き物関係	7
	植物・生き物を含む自然関係	23
	地名	3
	器物	3
	人物	4
書体 (延べ数)	篆書体	3
	隸書体	0
	草書体	19
	行書体	17
	楷書体	8
	仮名	2
文字の位置 (延べ数)	「背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ」に等しい	3
	「背面右肩部」に等しい	15
	「背面右肩部」を含む	20
	「背面上部」を含む	17
	「背面中部」を含む	7
	「背面下部」を含む	10
絵模様の位置 (延べ数)	「背面左肩部～右腰部～右裾までのカーブ」を含む	8
	「背面左肩部」を含む	14
	「背面右肩部」を含む	8
	「背面右裾」を含む	12
	「背面左裾」を含む	0
	「背面上部」を含む	7
	「背面中部」を含む	5
	「背面下部」を含む	6
	「背面全体」を含む	3
	「背面右半分」を含む	5
	「背面左半分」を含む	1
	「右袖」を含む	18
	「左袖」を含む	5
意匠主題	物語	4
	謡曲	1
	歌舞伎	1
	能楽	1
	ことわざ	1
	特定の土地、名勝	2
	干支	2
	不特定の地の情景	25
	抽象的なモチーフ(器物、扁額模様など)	6
	その他	2

でき、小袖における文字文様の全容解明に向けた研究の基礎資料として足りるものとなった。

文字文様を自ら深く捉えたことで、文字文様小袖が書を用いた芸術作品である考えはますます強くなったし、文字が意匠主題の決定的要素になることから、文字の魅力・力の大きさを改めて感じさせられることとなった。今後は、小袖絵師と書及び書家の関係や、同一主題を文字文様有りと文字文様無しで意匠化した小袖の相違性や特徴を検討するなど、この資料をもとに引き続き文字文様の研究を行う。

6. 謝辞

本論文をまとめるにあたり、ご助言をくださいました福島大学人間発達文化学類 千葉桂子教授に心より御礼申し上げます。

7. 文献

- 1) 上野佐江子. 小袖模様雛形本集成 (1) 解題. 学習研究社. 1974; 22-25
- 2) 丸山伸彦. 江戸モードの誕生—文様の流行とスター絵師—. 角川学芸出版. 2008; 118-119
- 3) 三橋佐江子. 模様雛形本にみる小袖の地色と模様加工法—友禅染大成期前後—. 天理大学学報. 1963; 1: 31-41
- 4) 長崎巖. 染織資料としての小袖模様雛形本—小袖模様との関係を中心に—. Museum 国立博物館美術誌. 1982; 373: 20-30
- 5) 佐々木佳美. 江戸時代の町人女性の小袖に見られる「文芸意匠」—小袖模様雛形本の分析を通して—. 服飾文化学会誌. 2009; 10(1): 23-36
- 6) 河原由紀子. 近世小袖における『小倉百人一首』の意匠表現. 民族藝術 民族藝術学会. 1995; 11: 156-164
- 7) 新撰御ひいなかた. 稀書複製会. 1936
- 8) 河上繁樹. 江戸時代前期の小袖—慶長小袖から寛文小袖へ—. 月刊文化財 文化庁. 1982; 228: 27-34
- 9) 橋本澄子. 東京国立博物館保管の文字散意匠小袖について. Museum 国立博物館美術誌. 1980; 349: 4-20
- 10) 佐藤了子. 小袖模様雛形本にみられる古典文学を主題とした意匠について. 聖霊女子短期大学紀要. 1991; 19: 22-33